うろこアンソロジー　二〇一二年版

うろこアンソロジー 二〇一二年版 目次

年末　南原充士　3
オーイ、と叫べば遠くなる　鈴木志郎康　6
冬の街　高田昭子　8
時の声を聴いて　足立和夫　10
さめやらず　三井喬子　13
黒いシミ　おかだすみれこ　18
ほのかに夢に　倉田良成　21
るとろ　若井信栄　25
兄というもの　有働薫　26
逆走、もしくは時間錯誤　石川為丸　31
りんごの木　南川優子　33
習作「心理」、二題　＋　書き流し　酒菜1丁目1番地　冨澤守治　36
あいさつ　清水鱗造　45

年末

南原充士

気長にやろうよ　あせらずに
親の背中は　ないけれど
自分の足で　ゆっくりと
一歩前進　二歩後退
一番うしろで　へこたれず
他人の背中に　ついていく

気楽にやろうよ　落ち込まず
仲間がいれば　助け合い
自分のペースで　のんびりと
少々遅れて　しまっても

にこにこすれば　気にならない
鼻歌まじりに　歩いてく

気持ちは　ちょっと変わり者
がっくり来たって　そのうちに
おなかが空けば　立ち上がり
美味しいご飯を　ぱくついて
ああ満腹だ　満足だ
もうひと頑張り　できそうだ

悲観　楽観　あるけれど
辛さ　苦しみ　乗り越えて
作り笑いや　空元気
重い荷物は　あるものの
仰げば　空あり　雲がある
花を見ながら　歩こうよ

鳥のさえずり　聞きながら

オーイ、と叫べば遠くなる

鈴木志郎康

オーイ、
オーイ、
聚さん、
「壱拾壱」の同人だった人たちと会うこともなくなったよ。
阿部さんは三年前に亡くなってしまった。

オーイ、
阿部さん、
「飾粽」の同人だった人たちと会うこともなくなったよ。
昶さんが去年亡くなった。

オーイ、
昶さん、
あなたの一周忌のお墓参りに行ったよ。
この春、哲男さんたちと市ヶ谷の外堀の土手の桜のお花見をした。
その時、鱗造さんと亡くなった吉本隆明さんについて議論したよ。
秋になって、吉本さんの詩は意味を超えた叫びだってわかったんだ。
昶さんとそんな話しをしてみたかったね。
藤井貞和さんは、秋も深まって、
三五五ページ厚さ三センチの評論集『人類の詩』を出したよ。
近いうちに読もうと思う。
そしてわたしは来年には詩集を出したいね。
オーイ、
オーイ、
みんな、遠くなるなあ。

冬の街

高田昭子

銀杏の黄色い葉がすっかり落ちて
つつましくカサコソと舗道が声をたてている
この街へおとずれると
どこへでも行けると教えていただきました
磁石地図も持っていません
満腹してる赤いポストは口をつぐみ
伝言や行先や名前がわかりません
あるくひとのかたには陽があたって
ながい足さきのほうには影がのびています
わたくしこそが捜されていたい
ここの言葉はなんですか　わたくしにも影をください

ベンチに腰をおろして冷たい街の空気を吸い込むと
野良猫言葉が聞こえるようになったの
ガムを噛んでいると銀杏の裸樹のしわがれた声も
理解できるようになったの
わたくしはかわりに言葉を失った
こわい　いいえこわくないのです
耳の奥の透明な震動膜が聴き取るものが
街の言葉ですから
あおい空にすぅーっと吸い込まれる街なのです。

＊　＊　＊

この詩には北村太郎さんの「暗号詩」に倣って、「暗号」がかくされています。
ヒントは行頭の「い」から出発、あとはジグザグジグ……と辿ってください。

時の声を聴いて

足立和夫

古い刻だった
突如
巨大な黒い岩にぶつかって
時間のしずくという奇妙な道に
巻き込まれたひとたち

草男には
その戻し方を教えられない
もし知ったとき
ひとは大きな岩のひとつになるだろう

遅滞する動きの静かな響き
風になびくだけ
ひとのみだれた足跡
謎がひとつふえるだけなんだ

真っすぐに死にむかってる
ひとの死
われわれが居るという謎のひろがり
老樹の深い沈黙
時間のしずくがあることの不可思議

宇宙の奥底から
つめたい声をもつ
異質の知性の記号が
おびただしくひとのそばに
投げ出される

記号の肌は怖ろしく
空気がひやりとする
時の袋なかに記号を放り込んだ

老樹の根元から
美しく澄んだ水が流れてきた
ひとの足元を水の匂いが囲む
ひとは智恵を切におもっていたので
水をたくさん飲みはじめる
すべてが見とおせるように願った

さめやらず

三井喬子

道を行く人の声で目覚めようとしたとき
忘れ物をしたような気がする
とても大事なものだったような気がするが
はっきりとは思いだせない、
大きさ重さ　肌触り
それを抱いて眠っていたとき
どれほど幸せだったことか、
と言う類いの

林檎を切っていたとき
ちょいと辺りにおいたのかも知れない

夢の一番温かなところに手をいれて探ると
亡くなった娘が
お母さん、わたしは幸せになれるの？
と聞いた
すくなくともお母さんはあなたがいて幸せよ、
と答えたが
あの娘にその意味は分かったのだろうか
ちょっと膨らんだお腹をぐるぐる撫ぜて
早～く来い　赤ちゃん来い
といって
あっちの方へ行ってしまった

あとには　脱ぎ捨てられた大人と子供の一対の服
タオル石鹸　おんなの哀しみ

少し冷めかけた奥をまさぐると

木箱だった
忘れ物はこんな中にはあるはずもなく
そっと蓋をずらしてみたが
うす青い壺が見えただけだった
何にもないって言ったでしょ！
蓋だって　ぷんぷん泡を吐いた

服をぬいであったので
つめたい水にそっとはいった
脚が途中で切れてずれて
指がちらちら薄くなり

底の方にわだかまっている光る紐は
忘れたものだったかも知れない、
足にからんで来るような

拾おうとして水中に潜ったが
ああ、誰もいなかった何もなかった

今日は捨てる日よ
大事な物を捨てる日よ…

まだ捨てるのは厭！
と言いながら抱きしめたら
抱きしめたものは壊れているのだった、
もう既にして　とっくの昔に

ビニール袋が光った
忘れ物は何だったのですか
これですか
あれですか

老いさらばえた肌ですか

金属製のゴミ箱から何か零れ落ちる

朝まだき

黒いシミ

おかだすみれこ

夜勤明けで帰宅した夫が
洗面所で何やらごそごそしている
ようすを見に行くと胸ポケットにボールペンをいれたまま仮眠したらしく
シャツについた黒いシミに洗剤をかけてこすっている

今回のヨゴレはひどくて彼の手に負えず
あとで染み抜きを買いに行くと言い残し自室に引き上げ寝てしまった

ところで　わたしたちは三十年も一緒に暮らしている
どこから見ても仲の良い中年夫婦で
夫は執拗にわたしと一緒にいることを望み

思いつくままに
料理もすれば皿洗いもする　洗濯物も自分で担うようになって何年だろうか

わたしはしばらく午後の時間をひとり穏やかに過ごしていたが
ふと思い出して洗面所に行き
放置されていたシャツを洗ってみた
広げてみると黒いシミは小さいながらも頑として黒く
わたしは夫のこころに触れたようでふいをつかれる

わたしたちは　棘のある礫をそれぞれのポケットに隠し持つ夫婦だ
わたしはずいぶんと長く夫を裏切ってきた
夫はわたしを取り戻すためなら手段を選ばなかった

そしていまは嵐に身を投げ入れるのがこわいので
危うい岩場にニセモノのシートを広げて暮らしている
そこが思いのほか居心地のよいときがあり

素知らぬふりをして潮風に髪を遊ばせていると
空高く海鳥があざ笑っていくのが見える

黒いシミの形相に慄きながら
わたしは夫が寝ているあいだに洗濯をして
雨の午後にシャツを広げる
帆のように翻るわたしの反旗
わたしは夫を裏切り続け　夫はわたしのプライバシーを侵し続けるだろう

ニセモノでもシートがあるから暮らしていく
ごまかしながら仲良くしていくことに馴染んでいた昨日だった
今日はあなたを濡らして雨がふっている

ほのかに夢に

倉田良成

Yの旧市街には開港以来の西欧式建築が多くあって、そのすべてが石造ではないにしろ、重厚な奥深さをたたえた構造感が、見るものをして、とくにわれわれのような倭国人の感覚を圧倒した。明治以来の旧銀行や旧商社建築、交易施設、市庁舎、税関などの正面玄関等には、堂々たるエンタシス様式の円柱が、たてもの内部へ人を迎え入れるとも、あるいは逆に衆愚の者たちからたてもの自体を警固しているとも見えたが、おそらくは表に雨ざらしになる壁面のみが大理石に蔽われているだけで、その他のほとんどの部材が基礎もふくめて当時手に入れることのできたベトンか、あるいは杉材松材であろうことは想像にかたくない。入口のほかにも、たてものの頂上付近の円いドーム、青い円蓋、あるいはそこから人が群衆に向かって手やハンカチを振るとも思われない、何のためにあるのか判じがたい装飾的なバルコニーなどが、しばしば認められる。これらは、なにかしらの贋物臭さと、同時にある種の迫力を感じさせるのであって、恐らくこうい

う感じは大連とか上海、マラッカやムンバイなどの港町にも共通する「感じ」なのであろう。なかでも建築壁面に取り付けられたさまざまなレリーフ群には眼を引きつけられた。青空の下でも曇天でも、あるいは夜間のライトアップされた光景でもいいけれど、複雑に象られた紋章や、瞳のない天使あるいは精霊の、頬をふくらした像、将軍が胸に懸けるみたいな華麗な組紐の垂れ下がり、また恐ろしい怪鳥が叫びをあげているさまなど、それらの浮き彫りをはるかに見上げるだけで、じぶんでも説明しがたい疼くような心のありさまになるのを常とした。立体物でありながら、底翳の眼球を見るような、書き割りみたいな一種の連続の寸断、あるいは遠近感の不在、つまり凄まじい「浅さ」があるように思うのだ。それらの浮き彫りに対しては、エンタシスの柱とか装飾的なバルコニーのたぐいとはあきらかに異なる、たとえそれが贋物の装いのさまであろうとも、なにか宗教的な、とでもいえる畏れの感情が交じっているのだった。たしかに高々それらは漆喰のこしらえものすぎない。だが、そこにはまったく別の世界のようだが、街道の三叉路の岐路に当たるポイントにしばしば見受けられる、庚申塚、地蔵堂、閻魔堂などを覗いて見るおりの感情と共通する性格がある。ハンス・カロッサの『幼年時代』という小説冒頭に、聖母マリアの龕（がん）を覗いて見るハンス少年に、似たような畏怖の感情の記述があったことを記憶する。別の折、たしかローマの城壁にも至る所に、そ

れこそ青面金剛や地蔵堂みたいに、こういう種類のマリアや聖人の龕がおびただしくあったのを覚えている。これら「贋物」たちは、どうしてこんなにもわれわれを惹きつけ、心の深部をかき揺らすのだろう。おおむね、このYという街にも似たような色合いがある。朝から夜まで、Yの岸壁から港の殷賑を眺めていると、このうつし世はしょせん板のうえの芝居なのだという確信が、まるで新鮮な怒りのように、鬱勃と涌き起こってくるのだった。

ほとけは常にいませども、
うつつならぬぞあはれなる、
人の音せぬ暁に、
ほのかに夢に見えたまふ。

＊『梁塵秘抄』より。

るとろ

若井信栄

若者よ
夢をあきらめるな
希望をすてるな

老人は
夢をあきらめろな
希望をすてろな

兄というもの

—義姉(ねえ)さんに

有働薫

(聡明な兄です
見事にやってのけました
だまれ、だまれ、だまれ！
わたしを叱りつけたあの兄です)

名古屋の銀行員になった兄が休暇で帰宅していたある日
いっしょに上野の美術館に行きました
小学生のころ図画の先生にいつもほめられて
それからずっと兄は絵が好きでした

いちばん好きな絵を

買ったつもりのゲームをしながら
いちどだけでしたが楽しいデートでした

兄は
ゴッホが嫌いなのだそうで
なぜか
理由は聞きそこなったまま

兄をほめた図画の先生にお前の足は棒だなあと言われたわたしは
ゴッホの絵が大好きですけど

真白に太く
マンモスの牙のように
目前にある大腿骨
ねえさんの親族から囁きがもれる
生活者の骨—まだ十年はもっただろうに

いつもの夕方テレビの前で
野球中継の最中に
つんのめって血を吐いた

昼に竹の子飯の弁当を平らげ
隣家の幼児をあやし
その子が男の子か女の子か
ねえさんと言い争い

愛地球博の折に
兄宅に一夜泊めてもらったわたしに
やがて来る自分の死を
示した
風呂上りの半裸の兄
六年前の

夏の夕方
黙って

＝ｃｏｄａ＝

これまでせっぱ詰まったことがいくどかあったけど

生活費を稼ぐあてもないまま離婚してしまったとか
来月の生活費のあてがどうしても見つからないとか
満を持して有り金はたいて出版した本がまったく売れないとか
長男が第一志望の会社に面接で落とされたとか
中二の次男が家出して十日のあいだ行方がわからないとか
まだまだ言いにくい自分自身のピンチもいくどもあった
ときどきそんな折に
ときどき救世主
経済面では長兄や次兄の助けだったり

思いがけぬ受賞の知らせだったり

崩壊寸前の臨界点で
救われて

逆走、もしくは時間錯誤

石川為丸

木々の葉はすつかり吹き飛ばされて　今は台風一過　風もやんで　日差しは強く　陰翳の濃い真昼時　人気のない静やかなたたずまひの集落をさまよひあるけば　七色の風車を回しながら　幼い頃の妹が駆け抜けていくやうでした　向かふからは痩せた祖父がものうげに荷車を引いて来さうです　傾きかけた家屋の軒からはリユウキユウツバメが素早く飛んでいきました　風鈴の音色がいきなりかなしく聞こえます　海が見たくなつて、海坂を降りていくと　小島へ渡る橋がありました　欄干にもたれて覗いてみると　見たこともない水母が幾匹も流れていきます　幾匹も幾匹も永遠に続くかのやうです　ゆらゆらゆらゆら　たたかひに出たまま行方不明の兄さんがゐるやうで　叫びそうになつてぼくは　もと来た道へ走りました　腐りかけた材木が倒れ掛かつてきさうでした　焼け焦げた残骸にけつまづき　頭を振ると　一陣の熱風が吹きすぎ　瓦礫の原を走る子どものぼくがゐました　なつかしくなつて白い石畳道を登つていくと　ガジユマル

の深い緑のなかに　御嶽（うたき）があつて　琉球石灰岩の暗い空洞を吹きぬけてくる風に向かひ　老婆が一人お祈りをしてゐました　そのかたへには　むずむず揺れ動いてゐる得体の知れない幼虫が　糸を吐いて　繭にならうとしてゐます　それは＊刺されたら半時間で絶命するといふ近東砂漠の植物に湧くジヒギドリに酷似してゐました　静かにしやがんでゐる老婆の肩で　その虫が繭をつくりながらぴくぴく揺れてゐます　見上げればもう夕暮れで　黒いオオコウモリが飛び交つてゐました（つづく）

＊以下、「……ジヒギドリに酷似」までは黒田喜夫「毒虫飼育」より。

りんごの木

南川優子

これは　何かの罰なのか
それとも　ごほうびなのか
あなたは今夜
りんごの木の下に
わたしを寝かしつけた
いつもの部屋であなたが
鴨の羽毛のふとんに包まれ
寝息を立てている間
わたしは白いパジャマ姿で
湿った土の上に　横たわっている
りんごの実は

赤が黄色を侵し始め
枝にかかる　くもの巣には
虫けらたちが　死んだ音符のように
捕らわれている
月が雲に隠れるたびに
りんごが赤みを増し
わたしの体めがけて　落ちてくる
わたしはじっと
その重みを受け入れる
わたしの体のなかで
重力と果汁とがとけあうとき
あなたは　夢をみながら
待っている
わたしの体が
すっぱい赤いあざで
あふれかえり

りんごの落下に耐えられるほど
したたかになって
あなたの寝床に戻り
あなたの愛を受け入れるのを

習作「心理」、二題　＋　書き流し　酒菜1丁目1番地

冨澤守治

プロ・メテウスへの道

わたしは静かにしているのに、騒いでいる
またも聞こえるひとびとの声

幾度か耳にした言葉たちの群れ
なだれいく群衆よりも秩序なく
肌に寒いか、あるいは汗ばんでいるのか
すべての季節と

いつでも、何十年も何百年も歴史のかなたから続いている

彼らの声は語りかけ

いつもわたしたちは応えようしたのだが
そのときにはもう聞いてくれるひともいなかった

「手遅れ」で、もうどうしようもない

たとえば、古くからいる友や恋人との話でさえ
即座に理解することはできず
記憶され記録されてから、はじめて本当のことがわかる

問い直す、そしてかくも聞く
われわれの能力のなさと不明晰さは
そのときには自らに知られることもない

なにをしよう

謝罪か、あるいは悪夢の衝動を認めようか

それで一体なにを取り戻せるというのだろう
助言者はいつも事態が崩壊してから現れる

われらは「先に考えるもの」ではない
あとから気がついている
「ヒト」というもの

「それでよいのか?」

この問いだけを残して、すべては暗闇のなかに消えていく

あやまち

すべては見たものに
あとから驚く

数え間違い、歌い違える
乱丁には幾つも原因があり

恐れを引きずり、混乱した頭で思案する

その時間はもうすでに遠く、いまも時間はどんどん過ぎていくのに
いつでもその「あやまち」のなかに戻っていく
あとから

街角

－酒菜1丁目1番地より、書き流し詩－

街角、夕暮れなどはとくにそう、街角にひとびとは群れる
しかし誰も、互いに会いたいからでもなく、むしろひとに会いたくもなく
ひとはどこかに向かい、すれ違っていく
そしてあまりにも早く、通りすぎていく

わけも知らない、携帯電話の通話やメールの電波が飛び交う、街角
破れた恋心に耐えている、悪びれた、しかもうら若い乙女は歩きまわり
うつむいてとほうにくれる男、悔しみか、疲れた怒りに力なくベンチに座る
紛れもない社会の一部

街角よ、夏は猛暑に焼かれ、冬はもう冷たい風が襲う
ヤニ臭いタバコの煙が指定喫煙場所に漂う、不快で、暑くて凍える
街角

わたしのこと

わたしもこの街角に居る。居てはいるのだが
どうしてかいつも、見かけるひとびとは現れては、消え
漂う風のように、わたしも街角を揺れ動いていく

春と夏と秋と冬
何度も、何度もわたしはこの街角を通り過ぎる
思えば、季節は大きく顔を変え
それはいつしか、時代が容貌を移していくのにも例えられる

わたしは、私は、僕は、、それ自体もそれほどの意味もないのかも
幼さも、凛々しさも、絶望も、痛みも、恋の心も
この街角を除けば
うつろいいくもの

「社会」

今日の街角は気分が悪かった
多くの疑い、多くの苦痛

すべてこの街を行くひとびとが心身ともに健康であるわけでもない
日々の暮らしは満ち足りているのか？
案外このことは誰も気がついてはいない

ひとびとはいつもなんらかのスタンダードを立て
あたかも、この街角を創る規範や約束事を、実際の生活と様式を、絶対的な君主のように
狂信者が奉る神か、神々のように考えたがる

すでに「ひとびと」をたてて考えるということ自体が
「私」も、そして大切な「あなた」でもなく

もう少し離れたちょっとは知人な、「彼」でも「彼女」でもない

他人との関係がすでに距離を失っている、本来あるべき隔たりを排除した
「私」、「あなた」の頭のなかにある、ただの「ひとびと」という概念
なんとも不快な、機械仕掛けの概念であり、妄想の築き上げた「社会」なのだ

そこではひとびとは何の苦痛もなく、生活も過不足はないだろう
どうして、そんなことがありえるのか

「私」や「あなた」は精神を偏り、人生の理念を達成することもなく
ありとあらゆる不足と不幸をかかえこんでいる
それでも「ひとびと」は、個々の個人を特定して考えようともしない

あたかも、そう、どうでもよいことのようにして

知人には

声はかけない
私は自分だけが気ままに、良ければ良いのではない

今日、帰りがけ
少しは話をしたことのあるひとに、声はかけなかった
もし疲れていたらどうしよう

あるいは具合が悪く
一刻も早く、家に帰りたかったら
どうしよう

そんなひとに
道中は長いのかもしれない

あいさつ

清水鱗造

透かし絵に
煙がたなびき
草の穂が揺れる
生垣が続く路地など親しいものが
うすく見えている

やにわに船が
絵の外から現れて
その舳先が茶色にも
金色にも変わり
いずれにしろ

時間の経過とともに
輪郭がはっきりとする

何年にもわたり
色気もなく通過するだけだった貨物船が
白い航跡を泡立てながら
初めてこちらに
手旗信号で
あいさつを送っている